

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦 XII



平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦
XII

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦 XII

平成十四年三月二十九日 印刷

平成十四年三月二十九日 発行

編集 東京都市新宿区西新宿二丁目六番一号
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 文唱堂印刷株式会社

ま え が き

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ、永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立されました。

当基金では、その業務の一環として、関係者の労苦に関する調査研究を実施しており、この「平和の礎——海外引揚者が語り継ぐ労苦——」はその成果を取りまとめたものです。

この業務の実施に当たり、当基金は、平成元年度から社団法人引揚者団体全国連合会に、主として次の三つの観点から引揚体験者の手記の執筆により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきました。

- (一) 海外居住の動機と家族状況
- (二) 終戦直前・直後の生活の変化
- (三) 引揚げ及び生活安定までの労苦

同連合会では、全国的に活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「海外引揚者に係る労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされました。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であります。報告された労苦記録の各編には、海外居住者の引揚げにまつわる数々の労苦がつづられており、過酷な状況の中で生死の境をさまよいながらの引揚げ、引揚げ後の生活再建の過程での艱難辛苦といった労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれています。

終戦時海外にあった軍人軍属及び一般邦人は、約六百六十万人であり、一般邦人はそのうちの約半数を占めていた（厚生省『援護五十年史』抜粋）。戦後五十六年余りが経過し、戦後生まれの世代が人口のほぼ三分の二を占め、戦争に関する意識の風化が進んでいるといわれる今日、海外引揚者の労苦を徒労に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は貴重なものと考えます。

本巻には、満蒙開拓団員一家の子供（姉と弟）の手記を含む二十五人の方々の労苦の記録が掲載されていますが、第一巻から数えると六百四十一編の体験記録が所収されたことになります。

最後に、実際に執筆に関わられた多くの方々のご協力と調査研究に当たられた連合会関係者のご努力に感謝するとともに、本書が関係者のご労苦について国民の皆様の理解を深め、かつ、後世に伝えるための一助となれば幸いです。

平成十四年三月

平和祈念事業特別基金

理事長 上村知昭

海外引揚者が語り継ぐ労苦

XII

目次

ま え が き

上村 知昭

過去の記憶

嗚呼、こころの故郷 撫順の日々よ！

佐藤 恭典
佐藤 周 248 233

〔満 州〕

生涯を開拓に託した私の人生

東安高女、血染めの日の丸鉢巻

純子！

流転の男児

運命の半生

赤峰から引き揚げてきて

避難乞食行

スパイ容疑と国籍剝奪に

さいなまれて！

私の戦中戦後十四年の軌跡

満州で生まれ育った私

ハルビンの鐘

戦争に生きた青少年時代

三十八度線を越えた！

旅順、大連での体験

生死の境を乗り越えて

穴澤 武雄 1

森 勇男 17

阿部 とし 34

立花 薫 49

立花 悦子 63

渡辺 モト 78

岩間 重雄 91

福久 かずえ 99

久保田 穆 114

谷澤 淳 129

村澤 隆司 143

山田 耕作 160

青木 輝 178

仲野 和夫 195

渡辺 よね 214

〔中 国〕

上海日僑中学生の終戦日記

私の終戦

影山 澈 264
田中 恵子 283

〔樺 太〕

望郷、私の樺太

奥瀬 勝子 299

〔朝 鮮〕

私の労苦半生

三十八度線を越えて

鎮南浦から引揚げ

朔州から決死の脱出

三十八度線を突破して

私の三十八度線突破記録

黒川 日出松 315

二司 哲夫 327

温品 廣助 343

梶山 緑 356

〔南 方〕

思いは遙か、
ルソンの山へ

介川
勝代
374

満州

生涯を開拓に託した私の人生

北海道 穴澤 武雄

渡満の動機

私は大正七（一九一八）年十月、新潟県古志郡上塩谷村の平中野侯という田舎で、父源太郎、母ヨカの五男として生まれた。昭和七（一九三二）年に地元の高等小学校を卒業し、姉の嫁ぎ先で農業を手伝いながら農業補習学校に入ったが、昭和八年四月、上京のため中退した。東京では米穀商に就職して働いていたが、昭和十四年四月に長兄から満州開拓に行こうと誘われたので、参加するために退職して一旦郷里に帰った。

五月に長岡市で県庁の係員の審査を受け、兄と共に合格した。

当時、新潟県では第九次の開拓団を三個団編成する計画を立てていて、私達は魚沼三郡と古志郡との分郷への参加が決まり、その先遣隊として現地訓練所に入所し、必要な訓練を受けることになった。他の二個団の先遣隊員と合わせて約八十人近い人員が、新潟県知事などの激励を受けて、新潟港から「満州丸」に乗船、勇躍して満州に向かった。

昭和十二年七月に勃発した日支事変は、政府の不拡大方針とは裏腹に日に日に拡大して、中国大陸を進攻する日本軍の勝利が新聞やラジオで報道されていたが、世界が見る日本は、正義の戦争をしているとは認識していなかった。日常生活も徐々に不自由が多くな

り、生活必需品も手に入り難くなってきた。勤めていた米穀商でも米の取引が窮屈になり、まだ配給制にはなっていないかったものの、職業柄そんな情報も頻繁に入ってきて、何となく先行きの食糧事情には不安を感じていた。昭和十三年には徴兵検査を受けたが、私の周囲のほとんどの若者は入隊し、ほどなく戦地に向かつていった。私はどうしたわけか徴兵を免れていた。

故郷の上塩谷村は山間の寒村で、農地が少ないために、従来から分家は作らないという不文律のある土地柄で、跡取り以外の者が土地を持つということは有り得なかった。農業補習学校で農業技術を習得していた私にとっては、兄と共に満州に渡り、広い土地で農業を営む夢を実現するには、この機会を逃してはならないというのが、海外移住渡満の決心をした動機であった。

西火犁開拓団での生活

新潟港を出航した私達の一行は、日本海を渡り北朝鮮の清津に上陸、図們^{トモジ}、牡丹江^{ボダンジャク}、哈爾濱^{ハルビン}を経由して浜

北線の通北駅に昭和十四年七月に到着、トラックに乗り、現地訓練所のある第六次五福堂開拓団本部に至り、堀忠雄団長の歓迎の挨拶を受けて、各団ごとに分宿することになった。私達は、南魚沼郡出身者で構成している部落の宿舎に入り、満州開拓団での第一夜を過ごした。

そこで、哈爾濱幹部訓練所から来ていた小池佳嘉さんから、私達は西火犁^{セイホリ}地区に入植することが決定したので、一月末に哈爾濱を経由して五福堂に来るようにと指示された。小池さんは、一月末に正式に西火犁開拓団の団長になられて、二月に結団式を行った。二竜地区、東火犁地区の開拓団への入植が決定した人達も、それぞれの目的地に向かって出発した。

私達が入植した西火犁地区は大草原地帯で、満州事変以前にロシア人が一時開拓をしていたことがあったが、その名残として畑に畦の跡があり、集落のあったところも見受けられた。新しく開拓して建設していくことは大変な仕事なのだとしみじみ感じたものだった。西火犁の地名の由来は、ロシア人がトラクター

（火型）を使って開墾したのでそれがそのまま地名になったという。そのくらい、完全な荒地であった。

五福堂開拓団の隣接地に居住していた現住民の住宅を借り上げて仮本部、仮宿舍とし、そこから西火犁地区に通って移住の準備をするようになった。県公署警務科から小銃二十五丁と拳銃二丁が貸し付けられて、結局、終戦まで先遣隊の者達が管理していた。

当時、小興安嶺の山中には「反滿抗東北救国第二軍」と称するゲリラ部隊の本拠があった。隣接の第六次流老街基琦玉開拓団は、数度にわたってゲリラによる襲撃を受け、犠牲者も出ていたとのことだったが幸いにも私達の所では、一回放火されただけであった。昼夜にわたる警備を二年ばかり続けたが、奥地の柳毛溝地区に三個の開拓団が入植したので私達の警備は中止になった。

四月までは現地に入ることはできず、五福堂の仮宿舍から通いながら、屋根をふくための羊草刈りなどの作業をしていた。そのうちに滿拓公社からトラックを借り受けたため、それに乗ってようやく現地に入れる

ようになり、仮本部の位置を選定した。

生活に一番必要な井戸は、現地の中国人と井戸掘りの委託契約を結び、四月上旬に完成した。これで本腰を入れて五福堂からの移転の準備が開始され、板囲いで草葺き屋根の仮共同宿舍と炊事場、仮本部事務所などを建て、五月の中旬とりあえず五福堂から移転した。開拓団としての体制が一応整備された形となった。六月になると補充先遣隊が内地から二十五人程到着し、開拓団内は活気づいた。それぞれの責任分担を決め、建設作業も順調に進んでいた。

本部部落の建設を第一年度計画として、共同宿舍二棟、車庫、診療所、それに二戸一棟の個人住宅十三棟、井戸二本、共同炊事場、共同浴場などを、私達と業者の手によって完成させた。建築用のれんがは、現地に製造を委託し、地区内で生産して利用していた。

五月になると、滿拓公社のトラクター班が開墾を開始した。まず手始めにソバを播種したが、収穫はなかったようだった。越冬用の野菜類については十分に

収穫ができたという話だったが、私は経理係をしていたので農作物関係についてはよく分からなかった。

七月に入ると、新潟県分郷計画の地域から、応援作業班として男子十五人、女子五人の計二十人の人達が来て奉仕作業をしたが、八月には新潟に帰ってしまった。十月になると、不足していた施設も大方完成したので、仮施設からの移動を開始したが、これらの施設はほとんどが業者の手によって建設されたものだった。居住施設も完成し、団としての形がおおむね整ったので、十月から年末にかけて、妻帯者達は家族招致のためそれぞれの郷里に帰って行った。残留団員は少なく、昼夜の警備は大変な仕事となった。

二年目に入ると、本部事務所、幹部宿舍、れんが積みみの小学校や、農産加工場などの建設が完了した。第二部落、水田班の第三部落の三十戸単位の個人住宅二カ所も建設を完了。満拓公社の測量係によって水田用水路の測量が実施され、昭和十七年にはかんがい用水路も完成した。この作業は吉林省から来た水田耕作に経験のある朝鮮人労働者の手によるものであった。昭

和十六年には畜産指導員や保健指導員もそれぞれ着任し、開拓団としての陣容は完全に整備された。

私は、昭和十六年四月に、結婚のため一時帰郷し、五月には新妻を伴って西火犁に戻った。同じように家族招致のため帰国していた人達もそれぞれ家族を連れて戻ってきたので、団内は一段と活気づいてきた。二カ所に完成した部落に分散し、開拓団共同経営から部落共同経営に移行したが、経営は順調に進展していった。朝鮮から使役用の牛が五十頭近くも導入されて各戸に配分され、農耕作業もようやく人力から畜力に移りつつあり、毎日の仕事も多少は楽しくなってきた。

昭和十七年には、さらに新しく二カ所の部落を造成する計画が立てられた。また、軍用保護馬の調教委託では、九州産の日本馬に随分手こずり、苦勞したものだ。乳牛も導入され、十八年には我が家でも二頭飼いはじめた。一頭はエアシャー種、他の一頭はホルスタイン種で共に搾乳し、翌年には牝の子牛が誕生した。さらに一頭導入するなどして増頭を図った。

昭和十八年になると、団内でも応召者が増えてき

た。翌十九年、そして翌々年の昭和二十年にかけてついに根こそぎ動員となり、各部落とも男子は年配者が四、五人しか残らなくなって、農業生産もがた落ちしてしまった。本部も、団長と農事係と経理係の私とのわずか三人になり、全く大変な事になったが、こんな事態になってもまだ、誰も戦争に負けるなどとは想像もしていなかった。

昭和十五年に現地入植以来足掛け六年、慌ただしく建設を進めてきた結果が、開拓団の崩壊という終末を迎え、満州開拓の夢は消え去りつつあった。

終戦そして避難行

八月十三日には、西火犁地区より約五キロメートル程奥地に入った鶏走河曙開拓団の方面に焼夷弾が投下されて、「いよいよソ連軍が近づいてきたな」と皆で話し合っていたが、その後しばらくは何事もなく過ぎた。

八月十五日には例年のとおり本部前で部落集会を実施していたが、珍しく飛行機が飛んでいるのを見て、「まだ日本の飛行機もあるのだ」と皆で話していたが、

それはハルビン方面に向かっているソ連軍の飛行機だった。ラジオも無く電話も無く、今日重大放送があつて終戦になったことなど誰も知らなかった。私は十六日に、通北駅前にある満拓公社の地方事務所に入申込資金と、連合会からの物品を受け取りに出張した。五福堂と西火犁の間の湿地帯に架かっている橋が八月六日の集中豪雨で流されたために、苦勞して徒歩で湿地帯を渡り、ようやくのことで通北駅に着き、満拓事務所に入った。事務所では北海道出身の阿部さんから一万五千円を受領、物品も中国人の馬車に積み込んで団に帰るべく駅前を出発したが、その日は友人の馬玉龍さんの家に泊めてもらった。

その途中で酪農開拓団の岡田さんに会い、「日本は戦争に負けて降伏したそうだ」と言われたが、私は半信半疑だった。しかし、城内の十字路で、県公署警務科の大使館地方兵事員の新潟県出身の南雲さんから、「日本は無条件降伏をしたそうだから、団に帰ったら報告するように」と言われ、初めて事実であることを知った。この辺りの道に詳しい馬夫のおかげで旧道を

通つて無事に団本部に戻つたが、通北の東門を出る時は、立哨している警官も普段と変わりなく通してくれ、たし、歩いている現地人も、表面的には何ら動揺していなかった。

団に着いて早速団長に報告したら、「神州は不滅だ、今さら何を馬鹿なことを言うのだ！」ときつく叱られて私の言つたことは信用されなかった。しかし、その日の午後になってハルビンに召集された五人の団員が「日本は降伏して、もう入隊の必要がないので除隊になつた」と戻つて来たので、さすがの団長も涙を流して呆然と立ちつくしてしまつた。その姿は今でも忘れることができない。早速、各部落の責任者を集め協議したが、先の見通しも全然つかず、県公署からも何の連絡も無く、ただ手をこまねくだけだつた。

八月十九日頃、五福堂から武器の取り扱いについて連絡があり、通北県公署内にある治安維持委員会に返納するようにとのことで、二十五丁の小銃と弾薬を八月二十一日に返納した。返納する時も城内は普段と変わらない状態で、我々に危害を加える者もなく全員無

事に戻り、敗戦の実感には沸かなかつた。

その後、各部落は団本部の部落に集結し、馬や役牛、乳牛、その他の家畜はほとんど放してしまつた。不平を言う者も無く、平穏な日々が続き、作付けしてある農作物はできるだけ収穫することとして、来るべき冬に備えた。だが、ここを出て南下することもあるかもしれないということ、最小限の荷物は準備しておくようにしていた。団の倉庫にある食糧は全部配分し、金庫の金は各部落の責任者が分割保管して南下時に備えることとなつた。集団生活のために定めたことは皆守つてくれたが、これは皆知り合ひだつたからだと思ふ。八月、九月は年寄りが二人ほど亡くなつたが、それ以外は病人も出なかつた。

十月に入つて間もなくのこと、西火犁地区内にあつた新潟県報国農場が土民の夜襲を受けたので、翌日、本部に避難してきて、各戸に二、三人ずつ分泊することになつた。そのうちに東火犁と西火犁の中間にある第十三次仙田村開拓団の人達も集まつてきたので、西火犁は大変な人数になつたが、こうなつたら成り行き

に任せるはかはなかった。それから毎晩、夜警を始めるようになった。十月の半ば頃、治安維持委員会からといって一人の中国人がやって来て、全員集まるように、ということ、本部前に男子だけが集まった。

「何が不足しているか、困っていることは」などと尋ねて帰ったが、私は以前、れんが寮の責任者の蘇志立の所を時々訪ねていたが、彼はそこで働いていた男で顔は知っていたので、それほど疑うこともしなかった。今考えると、男性の人数などを調べる目的だったのではなかったかと思う。

翌年、北安の黒龍江省主席公館で働いていた時に、北安の市街で彼とばったり会った。彼は軍服を着ていたので聞くと八路軍に入っていると言っていた。通北にいたころは国民党だったはずだと思ったが、彼は私が省政府で働いていることを知ると驚いて、詳しい話もせずに「再見^{ツァイチェン}」と言って去っていったことがあった。

話を元に戻して、終戦の年の十月末頃のある日の白昼、「晴天白日旗」を持った騎馬隊を先頭に、治安維

持の保安隊と称する三十人くらいの一段が団本部の前に来て、門を開けるように申し入れて来たので、致し方なく開門したところ、「男性を全員集めろ！」と指示した。全員が集まった所で、団長、校長、渡辺医師、そして本部員である私など数人の手を後ろ手にして縛り、警備詰所にしていた車庫の中に入れた。その他の男性も全員別の倉庫に押し込んで鍵をかけ、外に出られないように監視していた。詰所に閉じ込められた私達は次々と名前を呼ばれて一人ずつ外に出されたが、そこで彼らは「金を出せ！」と要求した。私もモーゼル一号の拳銃を背中に突き付けられて金を要求された。妻が金の隠し場所を私に教えてくれており、私は仕方なくその場所を教えたので有り金を全部取られてしまったが、そのお陰で何事もなく詰所に戻された。しばらくすると門の外が騒々しくなってきたので、耳をそばだてると、団内にいた保安隊と称する連中が、外に向かって発砲していた。門外からも中に向かって発砲し、銃撃戦となり、保安隊側も一人の死亡者を出して他は逃亡してしまった。解放された私達

が、今度は外の一団を入れたところ、友人だった通北の賈継山が先導する治安維持会の保安隊で、全員満警出身の人達で二十人ほどの一団だった。晴天白日旗を持っていたので、当時の通北の人達は国民党だったと思う。別の友人の馬玉龍は、馬占山將軍が戻ってくると言っていた。この辺りは満州事変以前は、馬占山の支配地域だったそうで、馬占山の人氣は高かった。治安維持会の人達は、先の偽保安隊は全然知らない連中で、多分北安方面から来たのだらうと言っていた。団の事情に詳しい現地人の手引だったと思う。

湿原地帯の水が引くと、自由に馬車も通れるようになり、治安はだんだんと悪くなってきた。前の事件から一週間くらいして、早朝に二回目の襲撃があった。

男性全員が門の所に集まり、騎馬隊を先頭に二、三十人の一団が近づいてくるのを見守った。その時、部隊から脱走して団にたどり着いた日本兵五人の中の一人が、持っていた手榴弾を一発投げたが不発になった。彼らは、銃を乱射しながら門を破って入って来た。こっちは武器は全部返納してしまったので逃げ回る他

はなく、運悪く五人が銃弾に倒れ犠牲となり、尊い命を落としてしまった。この騎馬隊は、馬車を仕立てていたので略奪が目的だったようで、最初の組とは別の集団だった。それから数回の襲撃があったが、みんな別の方面からだった。

日中に襲ってくることはほとんどなく、夕方から来るようになったので、その都度サイレンを鳴らして合図し、土塁の外草の原に逃げて、彼らが略奪して引き揚げたのを確かめてから戻った。彼らは食糧や炊事用具などは持つて行かず、衣類などの布製品を狙っていた。布団は中の綿は捨てて表側だけ持つて行った。私達もだんだんと着るものがなくなり、哀れな姿になってしまった。十一月の末頃に襲ってきた集団は、引き揚げる際に建物に放火していった。共同で暮らしている私達には大きな災難で、特に女性達は大変に動揺していた。何とかしなければと対策を考え、南下できるかどうか通北駅へ状況把握に行くことに決めた。その役目を私と茨木君の二人が仰せつかり、八月二十一日以来の外出となった。団本部から徒歩で約二

十五キロメートルもある通北駅に向かった。途中は何の異常もなく通北街の東門に着いたが、警備の詰所は無人で、十字路付近の商店街も全部閉まっていた。不審に思いながら駅まで行って聞いたところ、治安が悪くなり列車も不定期で、集団での南下は不可能だと言われた。その日は実験農場の小西さんの家に泊めてもらい、治安、暴動、迫害などの状況を聞いた。県公署の日系職員、満拓社員、第六次老街基埼玉開拓団、克東県の張文封と花園の両開拓団、それに白家鉄道白警村の人は九月に南下したが、小西さんは数人の実験農場の人は残留させられたとのことだった。県公署開拓科時代の田中股長も残留し小西さんの家にいたが、事情は話されなかった。その後どこかに連行されたと聞いたが、それからの消息は分からない。翌日、団に帰る途中に南門の所で二、三百人の兵隊の団を見た。灰色のだぶだぶの服装であり兵隊らしくない姿だったが、八路軍であった。それで無人状態の訳が分かった。居留民会の事務所に立ち寄り、東火犁開拓団の萩原畜産指導員から色々情勢を聞いたが、やは

り南下は無理だということだった。団に帰り報告した結果、五福堂に集結することになった。

代表者が五福堂に行つて許可をもらい、移動が決定し、昭和十五年の入植以来、足掛け六年営々として築いた西火犁開拓団を放棄して涙ながらに五福堂に向かった。五福堂の皆さんは温かく受け入れてくれた。

五福堂への移動

準備された一棟の宿舎に三十人ぐらいが入ったが、西火犁や報国農場から来た働ける者は、県政府やソ連軍の使役に出た。私も十二月中旬から報国農場の青年達と県政府庁舎周囲のバラ線張りに従事した。かつて県公署時代には職員宿舎だったところで、仮眠中に銃撃戦が始まり、バラバラと弾が飛んで来たが幸い我々には当たらなかった。銃撃戦は一晚中続き、朝方になってようやく収まり、国民党系集団の襲撃と噂された。翌日帰った頃は、ちょうど国民党と八路軍の内戦の最中で、通北駅でも事件があったと言われていたが、詳しいことは不明だった。五福堂に移ってから襲撃事件は一度も起きなかったが、通北駅に駐留して